



第91回 スペインの絶対王政

1 絶対王政と主権国家体制

- 16～18世紀のヨーロッパでは、国内の全ての権力が国王に集まる傾向があり、この政治体制を（ ）と呼んでいる。
- 一方で貴族や聖職者身分、ギルド、都市の商人なども特権を認められており、国王はこれら中間団体を通して民衆を支配した。

- 十字軍の失敗、長期間続いた百年戦争やバラ戦争、荘園の崩壊、戦術の変化（軍事革命）などで騎士や諸侯は没落し、国王の廷臣となっていった。
- 十字軍の失敗、教会大分裂、宗教改革などで、教会の権威も大きく低下していた。
- 国王は、（ ）と（ ）を組織し、強力な統治を行った。
→国家は、官僚制と常備軍を維持するために、積極的な経済活動を行った。
※この政策を（ ）といい、各国で様々な形で行われた。
- また国王が国内の全ての権力をにぎるようになると、国王の統治する領域がはっきりとした国境で囲まれるようになった。
→このような国家を（ ）という。ヨーロッパではこれら多数の主権国家間による国際秩序を（ ）といい、現在まで続いている。
- 国王は、「国王の権力は神から授けられた絶対的なものである」と主張し、自分の権力を正当化する（ ）を唱えた。

2 スペインの絶対王政

- スペインが採用した重商主義は（ ）と呼ばれ、金や銀を貯めることが、国の強化につながるという考えであった。
→そのためスペインは、「新大陸」の植民地で金や銀を採掘し、本国へ送った。



☆スペイン王国（スペイン=ハプスブルク家）（1516～1700年断絶）

- ◆（ ）（在位 1516～1556年）
- 1516年、フェルナンドとイサベルの孫で、（ ）出身のカルスが、カルロス1世としてスペイン王となった。
→1519年、父方の祖父マクシミリアン1世の死により、（ ）として神聖ローマ皇帝にも選ばれ、スペイン王と兼任した。

カルロス1世(カール5世)
何度も登場する人物。
スペイン王位と神聖ローマ皇帝位が、偶然転がり込んできた。

<カルロス1世（カール5世）時代の対外関係>

- （ ）では、フランス王（ ）と激しく争った。
- 世界最大の帝国であった（ ）に対しては、劣勢の状態が続いた。
→1529年には都の（ ）を包囲され、1538年の（ ）でも完敗した。
- カルロス1世時代のスペインは大航海時代を迎えており、コンキスタドールであるコルテスやピサロが新大陸に進出した結果、大量の銀がヨーロッパに運ばれた。
- またポルトガル人の（ ）による世界周航も援助した。



カール5世の最大のライバルといえば、やっぱりこの人。ヴァロワ朝のフランス王である。

フランス王フランソワ1世



スレイマン1世



プレヴェザの海戦

スレイマン1世は、オスマン帝国全盛期のスルタンである。ハンガリーを征服するなど、活発な外征を行う一方、法律の整備も行った。



ピサロ

第85回のプリントを見ておこう。コンキスタドールを代表する人物である。カルロス1世の時代ということにも注目。

3 スペインの繁栄



フェリペ2世

当時のスペインが強大だったため、豪快な人物という印象があるが、実際はクソまじめなタイプである。狂信的なカトリック教徒であった。

◆（ ）（在位 1556～1598年）

- カルロス1世の息子フェリペ2世は、父親からスペイン王国を継承した。
※神聖ローマ皇帝位は、カルロス1世の弟フェルディナント1世が継承した。
- 1559年、フランスと（ ）を結んだ。
→ようやくイタリア戦争が終結した。

<フェリペ2世時代のスペインの繁栄>

- 1571年、（ ）でついにオスマン帝国を破った。
- 父の時代に引き続き、新大陸から大量の銀をヨーロッパへ運び込んだ。
- またアジアでは、（ ）を拠点に交易を行った。
- 1580年、（ ）を併合した（～1640年）。
→両国の王を兼任し、「 」と呼ばれる広大な領土を得た。



エル=エスコリアル宮殿

マドリードの近郊にあり、フェリペ2世はこの宮殿に引きこもり、書類仕事を一日中やっていたらしい。現在は世界遺産に指定されている。



レパントの海戦

スペインはヴェネツィアと組んで、はじめてオスマン帝国に勝利した。しかしこの敗戦により、オスマン帝国の勢力がただちに衰えたわけではない。セルバンテスが参加していたことは有名ですね。